

令和 6 年度

霧島市議会 広報広聴常任委員会

行政視察報告書



奈良市議場にて

(西脇市、朝来市、京田辺市、奈良市)

令和 6 年 11 月 12 日 (火) ~ 11 月 14 日 (木)

1 日程

令和6年11月12日(火)～11月14日(木)

2 視察先・調査概要

(1) 兵庫県西脇市

調査事項	議会だよりモニター制度、課題懇談会、オンライン予算広聴会について
人口	37,819人(R6.9.1現在)
面積	132.44 km ²
議員定数	15人
概要	・議会だよりモニター制度(見やすい紙面、より一層の充実を目的) ・議会と語ろう会 自治会型:80自治会2年間で開催、依頼文書の配布から調整まで議員にて運営 課題懇談会:委員会が必要とするテーマで、市民の関連団体等への依頼で開催

(2) 兵庫県朝来市

調査事項	高校生議会について
人口	27,844人(R6.9.1現在)
面積	403.06 km ²
議員定数	18人
概要	令和3年から市議会の100回記念として開催。市内の2高校から18名の高校生が参加。議員と事前に学習会を開催し、議会のみで運営。

(3) 京都府京田辺市

調査事項	議会報告会について
人口	71,955人(R6.9.1現在)
面積	42.94 km ²
議員定数	20人
概要	・「たなフェス」での市議会ブース出展、議場見学ツアーでの議会クイズ ・「きららちゃん議会」を同志社大学の協力により開催

(4) 奈良県奈良市

調査事項	子ども会議について
人口	347,888 人(R6.9.1 現在)
面積	276.94 km ²
議員定数	39 人(現員数 37 人)
概要	平成 27 年に条例施行された「奈良市子どもにやさしいまちづくり条例」により開催。小学 5 年生から高校生までのメンバーに、大学生のサポーターが入り運営。

3 所感

委員長 野村和人



西脇市 議会が行う広報・広聴活動の基となる議会だよりの一層の充実を図るために「議会だよりモニター」を導入されていた。年 4 回の発行ごとにアンケートを実施し、年 2 回は協議会を開催されていた。10 名募集されていたが、8 名の任命で、年間 2,000 円の商品券がお礼となっていた。アンケートの内容は主にデザインや色使い等のように紙面のモニターと感じた。また、議会と語ろう会は、議員のみで運営されており 20 自治会を 5 班に分かれて通年的に開催されていた。意見交換が主体でワークショップ形式での開催で、政策提言までの流れが明確で、市民の声を政策に反映するための工夫に感心した。また課題懇談会は、時期を得たテーマごとの開催で市民の声をもとにした政策判断の礎になっている。学生への自主学習スペースの開放にも共感した。本市議会も、議会をより身近に感じて頂き、どのような流れで市民の声が市政に反映されるのかを、「より！見える化」しなければならないと再確認した。

朝来市 選挙権年齢が 18 歳に引き下げられた事と市議会 100 回記念として高校生議事を令和 3 年から開催。朝来市内にある 2 校の高校から 18 名の参加。高校の授業として地域探求の授業があり、そこで地域課題を抽出され、議員と共に学習する機会がある。答弁は執行部との調整をせずに議員が答弁している。高校生が自ら感じる地域課題に対して議員と共に考える機会がある事がとても良いが、答弁も議員がしている事で、答弁内容が曖昧な状態になりがちではないかと危惧する。執行部が関わらない状態での高校生議事は、答弁内容に期待している生徒に対して良いのだろうか疑問に思う。高校生が地域課題に関心を持ちながら、共にまちづくりしている実感ができる企画であると感じた。本市も、もっと議員が汗をかきながら、若者の考え方に触れるべきと感じた。

京田辺市 平成 24 年に霧島市と災害時相互応援協定を結んでいる京田辺市では、コロナ禍における議会報告会を模索し、「たなフェス」での市議会ブース出展や議場見学ツアーでの議会クイズ等を開催していた。市民からの議会は堅いイメージが先行していると感じている中、気軽に声を掛けられる議員、議会であるための手法としてとても良いと感じた。日頃から身近に感じてもらうことが、共につくるまちづくりのきっかけになると考え参考にしたいと思う。

奈良市 平成 21 年 7 月に当時全国で 2 番目に若い 33 歳で当選した現在の市長の熱き思いで、平成 23 年から条例検討委員会を開催し、平成 27 年に条例施行された「奈良市子どもにやさしいまちづくり条例」に沿って奈良市子ども会議が設置されていた。子どもの意見表明や参加を支援するための取組や子どもたちが話し合い意見をまとめ、市長・教育長に提出する事ができる仕組みは、子どもにやさしいまちづくりに参画している経験として、将来に渡って重要な経験だと感じる。奈良市では、議会主導ではなく子ども未来部子ども政策課が取り組んでいたが、同様まで無くとも議会が子どもの意見を聴取する機会をつくることは、とても重要だと考える。このような経験が将来に渡るまちづくりへの参画や、投票率等の向上にも繋がると感じる。多様性を認め多様な意見を公聴したうえで判断しなければならない議会は、より多くの意見を聴取する事が務めであると再確認した。

副委員長 竹下智行



西脇市 議会だより作成は、編集会議で前号の振り返りを行い、写真やイラストをふんだんに使い、文字ポイントにも配慮していた。議会だよりモニターを年度で固定化し、幅広い年代から参加してもらい、意見を聴く体制を作っていたが、すぐにでも導入できると思った。議会と語ろう会は、事務局職員は参加せず、議長を除く 15 人の議員を 5 班に分け、地域性や経験も配慮し各班 3 人の議員が 1 会場を担当していた。共通テーマは広報広聴特別委員会が設定していた。課題懇談会は市民団体、市民グループを各委員会がテーマを決めて意見交換を行い、報告書をホームページ、議会だよりで公表していた。オンライン予算広聴会では市民から新年度事業について意見を聴取し予算審査の参考とする取組をしていた。広報広聴の委員会が主体的に考え、現状に甘んじることなく改革、実践する取組に刺激を受けた。

朝来市 高校生議会は令和 3 年 8 月に朝来市議会 100 回記念事業で初めて開催し、翌年度からも開催することが決まった。高校生の視点での質問や提案に対し、市議会議員が答弁を行う形式であった。議員は広聴広報常任委員会により割り振られた通告書に対し答弁書を作成。高校での事前学習会で常任委員長が出席し意見交換を行っていた。質問・答

弁が6分間の時間制限があるため時間調整に苦慮する点や答弁は議員がしている状況であった。本市では青少年議会があるが、執行部が中心となって企画、運営されている。理想的には議会が企画、運営し、通告書作成、質問のサポート等は議員で行い、執行部に答弁してもらう形式がよいのではないかと思った。

京田辺市 市民に近い議会を目指し、令和4年、令和5年の市民まつり「たなフェス」で、議会ブースを出展した。展示内容は議会クイズや興味を持っているテーマを1位から3位までシールによる投票と付箋紙で意見を貼ってもらう市民参加型であった。議員も普段着で親しみやすい雰囲気に対応し、市民に気軽に市政に参加してもらうため、市民が関心を持っているテーマをシールで貼ってもらうという情報番組でもよく使われる手法を使っていた。イベント終了後にはシールや付箋紙の内容を分析しており、議員の一般質問に繋がることも期待される。同日に議場見学ツアーを開催し、市民と議会との距離が更に近くなるきっかけになったと思う。今回の取組から本市の健康福祉まつりのイベントで議会の展示ブースを出し、市民の声を拾うことができるのではないかと思った。また、議場見学までできれば議会を近くに感じる機会になるのではないかと思った。

奈良市 平成27年に奈良市独自の子ども条例「奈良市子どもにやさしいまちづくり条例」に合わせて、子どもが意見表明をする場として「子ども会議」を設置した。基本理念には子どもの最善の利益を第一に考慮している。会議に参加する子どもたちが話し合い、意見をとりまとめ、市長・教育長に提出する。「提案実現のために自分達に何ができるか」を考えてもらう機会を作ることは大事な視点である。子ども会議は主権者教育にも繋がる取組だと思う。

今回4市の取組は広報と広聴を深く考える機会となった。他市の取組を参考に、本市に合わせた取組を企画、実践していきたいと思う。

委員 松下太葵



西脇市 議会だよりモニターを取り入れており、企画、編集等に対する市民の意見や要望を聴取し、議会だよりの充実を図っていた。実際に意見を取り入れて編集していたのが霧島市も取り入れた方がいいと思った。

霧島市は議員と語り合いをしているが、西脇市でも本市と似ている議会と語り合いを実施していて、やはりどこかに負担がかかって大変だと感じた。市民の方が提案したことが実現しており、自治会加入率90%以上という地域柄もあると思うが、見習いたいと思った。

朝来市 高校生議会に取り組んでおり、実際に成果として高校生議会をきっかけに医療費助成制度の拡充がされていた。

①高校生等医療費助成事業

従来入院費のみだった助成内容に治療費が追加され、さらに、助成対象が「高校生等」から「高校生世代」に変更となり、通学していない方も助成対象となった。

②乳幼児等医療費助成事業について、所得制限が撤廃された。

市民に開かれた議会、信頼される議会を目指す取組の一環として、次世代を担う高校生の政治や地方自治への意識醸成を目的としており、いい取組だと思った。

京田辺市 霧島市と災害時相互応援協定を結んでいる京田辺市では、コロナ禍における議会報告会の代替手段として、市議会が「たなフェス」に出店し、市民の意見を募るための意見ボードを設置するなどの工夫を行っていた。また、議会の堅いイメージを払拭するため、議場見学ツアーや議会クイズ等の参加型イベントも開催され、議員と市民が気軽に意見交換できる場を提供することを目指していた。議会を市民に身近に感じてもらえる取組は、共につくるまちづくりのきっかけになると考え、今後もその手法を参考にしたいと思う。

奈良市 奈良市では、平成27年に「奈良市子どもにやさしいまちづくり条例」を施行し、子どもたちの意見表明や参加を支援するための「子ども会議」を設置していた。条例の基本理念は、子どもの最善の利益を第一に考えることにあり、子どもたちは会議の中で話し合い、意見をとりまとめ、市長や教育長に提案を直接提出している。また、その提案を実現するために自分たちに何ができるかを考える機会を提供することで、子どもたちの主権者意識を育む教育的効果も期待されている。子ども未来部子ども政策課が主体的に取り組んでおり、年間予算100万円を投じ、奈良市内の8大学から大学生サポーターを募って活動を支えている。一方で、奈良市議会や議員の関与がほとんど見られない。

委員 今吉直樹



西脇市 精力的に多くの取組を実施されている西脇市議会。中でも私が注目したのは「議会だよりモニター制度」だ。8名の幅広い年代の市民（30代、40代、50代）にモニターを担ってもらい、年4回の意見を聴く機会を設け、議会だよりの充実につなげている。モニター確保の課題はあるようだが、議員の努力により継続されており、制度として機能しているように把握した。また、課題懇談会の取組は、本市にも参考となる取組であった。委員会審査に必要な市民の声を把握する有効な制度であると感じた。

朝来市

高校生議会の取組は、主権者教育の推進に確実につながる取組であると感じる。16歳、17歳、18歳の年代に、自らが通う高校が立地するまちの課題を考え、調査し、言葉にし、人前で発表することは、大変貴重な時間であり、主体性や愛郷心を育む一助になり得ると考える。朝来市の未来のみならず、県全体、日本全体の未来の国力を向上させる有意義な取組になるであろう。朝来市の高校生議会の取組は、少ない予算で、市職員の労務により支えられていた。未来を創る大事な取組だからこそ、実施前と実施後の対応を充実させ、次に繋げる仕組みづくりが必要であろうと思う。

京田辺市

京田辺市議会は、様々なアプローチを通じて市民との接点づくりに取り組んでいる点に関心を持った。市の大きなイベント「たなフェス」へのブース出展や同志社大学の協力を得て「きららちゃん議会」の開催など、ユニークで柔軟な取組が行われていた。これらの取組は議会の開かれた姿勢を示し、市民の気軽な参加を促進していると感じる。特に、「たなフェス」ブース出展で行っていた関心ごとへのシール貼り活動や議会クイズは子どもたちにも楽しまれ、本市でも取り入れることが出来れば、議会への関心を引き上げる手法として効果的だと感じた。

奈良市

奈良市は、市長の強い意向により、子ども会議を通じて市の政策形成に子どもたちの声を反映させる試みを行っている。小学5年生から高校生が自らの意見を市長に提案している。会議は全5回、テーマは子どもたち自身が設定するようになっており、教育委員会も支援を行い、その活動をサポートしている。必要予算はファシリテータや大学生サポーターへの報酬を含め約100万円程度で、参加した子どもたちには図書カードが提供されている。この取組は、子どもたちの成長や意見表明のスキル向上に貢献しており、子育て支援の質の向上に寄与していると感じ、本市の参考となるものだった。

委員 山口仁美



西脇市

議会報告会・議会と語ろう会の開催は、5月と11月。2年で80自治会で実施。3人1組、事務局なし。平日夜に30分議会報告及び意見交換1時間の開催である。事務局のひな形から班長が依頼文書を準備、各自治会と打ち合わせして段取りしている。課題懇談会については、双方からアクションを起こせるところが利点であり、事務事業評価の対象団体と課題懇談会をしている。課題懇談会制度があることで、委員会から話を聞きに行きやすい。政策提言までの流れとしては、文書化して出すときは過半数、予算・決算は2/3の賛同を基本としている。頻出する話題は、所管事務調査化して時間をかけて結論を出すようにしている。オンラインは、3年前から開催し、まちづくりの専門の人が参加しやすく深い話ができる。参加者は多くはないが、1回で終わらないので、続けてやった方がよい。

朝来市 高校生議会については、立場が違くと、同じ地元の課題でも違う課題として捉えられる。高校生とビジョンを語るという意味では良い。質問を作り上げていく過程として事前学習を実施している。（地域探究を担当する民間の地域コーディネーター）
答弁については特に調整なく、各議員の考えで作っている。

京田辺市 コロナ禍で、集まったの議会報告会の開催が難しかったことから、同志社大学との意見交換会などいろいろな代替策を模索するなか、議会で「たなフェス」にブース出店するという方法でも市民参画の機会を作った。議会クイズや議場見学ツアーなども実施して好評だった。コロナ後は、通常の議会報告会のスタイルに戻した。議会報告会の参加者募集の際は、手分けして駅でチラシを配るなどしている。

奈良市 子どもにやさしいまちづくり条例を平成27年に制定した。子どもが意見表明・参加する場として設定している。提案実現のために「自分たちに何ができるのか」についても意見のまとめと同時に子どもたち自身で考えてもらっている。条例ができた際には、子どもがわがままになるのではないかという意見も議会から寄せられた。以前はこども議会があったが、現在は実施なし。今後は子ども会議の参加や、意見を出すのが難しい子どもたちの声をどのように拾っていくのかについて、周知の幅を広げていく。（各学校や養護学校、過去参加者経由の呼びかけなど）

上記の視察から、霧島市議会として市民とのタッチポイントの拡大が必要であること、ターゲット層に合わせた意見聴取の方法の工夫が必要であること、政策提案や施策化に向けて議会内組織間の連携が不可欠であることを確認できた。また、西脇市議会の事務局負担を抑える運営も参考にすべきである。早速取り入れられるものから取り入れていけるよう、協議を進めていきたいと思う。

委員 宮田竜二



西脇市 議会だよりの企画や編集等に市民の意見や要望を反映し、議会だよりの一層の充実を図ることを目的に「議会だよりモニター制度」を導入、8人の市民モニターを募集して、協議会を年に2回開催、メールでのやり取りが主で、報酬は年1回2,000円の商品券を配布とのこと。議会と語ろう会は、年間20自治体+各種団体と通年開催しており、精力的な活動に感心した。市議会をより身近に感じてもらうため、夏季休業期間中の生徒や学生に会議室を自主学習スペースとして開放していることは霧島市議会も真似ていいのではないかと感じた。

朝来市 市民に開かれた議会、信頼される議会を目指す取組の一環として、次世代を担う高校生の政治や地方自治への意識醸成を目的として、令和3年から高校議会を開催していた。高校生8名×市内の2高校=16名の高校生議員の質問や提案に対して、議員個人が答弁するシステムになっていた。これは、前日の西脇市も同じやり方で、執行権のない議員が答弁するのは違和感を受けた。朝来市議会内でも、執行部が答弁すべきではないかと意見があるようである。その点では、本市の青少年議会の方がよさそうに思えた。高校生議員の選出も学校長に一任しているようで、若者の声を市政に届けるという大義で高校生議会を実施されているようだが、イベント色が強く、あまり参考にはならなかった。

京田辺市 議会は、市民に対して、どのような議会審議を行ったか、経過や結果を報告し、市民と自由に情報及び意見を交換するための議会報告会を開催していた。コロナで議会報告会が開催できなかったため、代替手段として「たなフェス」に市議会が出店して、ご意見ボードで市民の意見を募集、工夫していた。これらの意見は、今後の議員の活動の参考にするものとしたとの説明があったが、実際の成果はないようである。そもそも、京田辺市は、京都、奈良、大阪に隣接するコンパクトシティであり、霧島市と環境が大きく異なり、参考にならなかった。

奈良市 奈良市は、市長の思い入れで、子どもにやさしいまちづくり条例をH27年に施行し、子ども未来部を組織化、奈良市内の8大学に大学生サポーターとなってもらい、年間予算100万円で「奈良市子ども会議」に取り組んでいた。大変進んだ取組だと思われたが、奈良市議会・議員が、ほとんど関わっていないことが大変残念であった。

最後に、ご多忙のところ、当委員会の視察を快く受け入れていただいた4市の皆さまに深く感謝いたします。

以上で、広報広聴常任委員会の行政視察報告とします。

霧島市議会議長 仮屋 国治 殿

広報広聴常任委員会

委員長 野村 和人

副委員長 竹下 智行

委員 松下 太葵

委員 今吉 直樹

委員 山口 仁美

委員 宮田 竜二